車いすバスケットボール 日本のエース！

プロ車いすバスケットボールプレーヤー

網本 麻里さん

（大阪国際大学 人間科学部 2011年卒）

2人、3人がかりで囲む相手をかわし、シュートを決める。「稲妻のようなスピードと正確なゴール」と海外チームからも警戒される車いすバスケットボールのプロ選手、網本麻里さんは、本学人間科学部スポーツ行動学科を2011年に巣立った。

大学2年の時、北京パラリンピックで133点をあげ大会得点王になり日本の4位に貢献。卒業した年のU25女子世界選手権メキシコ戦では64点中一人で51得点と世界記録も樹立。現在オーストラリアのプロチームと日本を行き来している。

生まれつき右足首の障がいで2度の手術。中学2年の時、小学3年からやっていたバスケットをあきらめ、「母が見つけてくれた」車いすバスケに出会った。バスケットがテーマの漫画「スラムダンク」の天才シューター「ミッチー」に憧れる少女は、車いすに変わってもその才能に磨きをかけ、シュートに納得がいくまで、打ち続けた。

高校1年春にオーストラリア遠征に参加したのを最初に、海外へ行くことは、ごく自然になった。現在所属するブリスベンのチームでは、チームメイトに巻き寿司を作ったりして喜ばれている。車いすバスケの普及や講演で全国各地を訪ね、世界や日本に、多くの知り合いや仲間も広がっている。「バスケに出会ったおかげです。いま、頑張れるのは、両親も含めて支えてくれる人、応援してくれる人が周りにいるからです」と感謝を忘れない。

来年のブラジル・リオデジャネイロパラリンピック予選が10月にある。今はすべてをこれに向けている。「優勝します」。そしてリオでメダルを獲ることが目標だ。決意は揺るがない。

スリランカでバレーボールコーチ、体育教師を務めた

界が広がった！ たちがいる。

国児に運動指導をしている松本 玲奈さん

「私 マツモト レナ 学生時代からバレーボール一筋。この国で指導をすべく着任しました」。青年海外協力隊（JICA）月刊誌連載の漫画の主人公が2007年に本学を巣立った松本玲奈さんだ。

小学校でバレーボールを始めた松本さんは、「ポリシーに惹かれ」滝井高校へ。技術だけでなく、心の部分や考える力、人間性を重視することを学び、「マネジャー候補」が、プロから声をかけられるまでになった。3年間で「自己を律すること」を学んだ。「自分は何をすべきか」「自分にできることは何か」。大阪国際大学短期大学部から人間科学部に編入。4年間バレーを続けた。教育に関心が募り、教員免許取得のため、卒業を1年延長。同級の看護士さんからJICAの活動を知り、「バレーボール」「海外」「ボランティア」が一つにつながった。卒業した年の9月、スリランカに渡った。

ウバ茶で知られる標高1500メートルの町で、学校やクラブ、県選抜チームを巡回指導。この時の様子が、冒頭の漫画に描かれた。スリランカの生活は通算5年になる。バスにお年寄りや妊婦、幼児を抱いた人が乗ってくると、近くの人は当然のように席を立つ。ごく普通の光景だ。幼い子から小さなチョコレートを半分もらったこともある。日本が失いつつある心の豊かさを感じた。「外国」「世界」を意識することはないが、それが世界とつながっているのかと思う。

去年9月からグローバル企業で営業を担当。教育、ボランティアとは異なるビジネスだが、「ここで学んだことを生かし」、近い将来「教育」に復帰したいと考えている。「人には必ずできることがあるし、使命がある。自分の心に聞いて、自分の求める方向に進んでほしい」。松本さんから後輩への言葉だ。

青年海外協力隊機関誌「クロスロード」に連載されている松本さんを主人公にした漫画「コートは空の下」

©あさみさとる

郵船ロジスティックコロンボ支店

松本 玲奈さん

（大阪国際大学 人間科学部 2007年卒）